
夜の妖精の小さな旅

水沢 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の妖精の小さな旅

【Nコード】

N1439Y

【作者名】

水沢 流

【あらすじ】

「大きくない、力だつてない。でも大丈夫、私には……」

小さな勇気と好奇心で、困難に立ち向かう妖精のおはなしです。

人物紹介に、ちょっとしたネタがあります♪

0 登場人物&内容紹介

> i 3 4 2 7 0 — 2 3 2 3 <

「作者より」

子供への読み聞かせ（寝物語）として書き始めたもの。

剣も魔法も使えない妖精が、ちよつとの勇気と、アイディアで困難を切り抜けて行く冒険ファンタジーです。

小学生ぐらいからを対象に、親子で読めるものをめざして——
スローペースですが、のんびりお読みいただければありがたいです♪

- - - - -

「よるの国はやさしくて、
うるさい音はなにもなくて。

ここが樂園だと言う人もいるけれど、
それだけじゃ、きつと足りなかった」

行頭の一字だけ読みすすめてみて下さい♪

- - - - -

・登場人物紹介

「ニツケ」

夜の妖精の子。

銀月色の髪と、アメジスト（紫水晶）色の目を持つ。

「ジオ」

夜の国にいる「小さいもの」。

ペリドット（緑）色のひとみに黒い体。

鳥になったり猫になったり魚になったりできる。

ほんのり光るしっぽの先は、気分によって色が変わる。

1 - 1 旅立ち

そこは、まっくらな国でした。

やさしいやみに包まれた、しずかなしずかな夜の国。

夜の妖精ニツケの物語は、この、夜の国から始まります……。

ニツケの髪は、銀月色をしています。
目は、すきとおるようなムラサキ色。

でも、ニツケはものを見たことはありません。
もちろん、ニツケだけではありません。

夜の妖精たちはみいんな、世界が見えていないのです。

パパもママも、王さまも女王さまも。

でも大丈夫。

夜の妖精は耳がとっても良いですし、お守りのおかげで危険を知る事ができるのですから。

「ニツケ、いる?」

「いるわ、ママ」

「ちょっと来て。ジウムおじさんに届けてほしいものがあるの」

「はい」

ニツケは立ち上がって、ママの声のする方に向かいました。

家のカベにはたくさんの文字が彫られていて、それにさわりながら行けば台所につきます。

夜の妖精の国の壁は、どこもかしこも文字だらけ。

みんなが、それを目印にして移動するためです。

「来たわ、ママ」

「はい、これ」

甘いにおいがするバスケットを、ママがニツケに手わたしました。

「なあに、これ？」

「あら、わかっているんでしょう？」

「ふふ、根っ子の実のジャムね。そうでしょう？」

「そうよ、おじさんに届けてちょうだい。いっしょに入れたアメは食べていいから」

「やった！」

ニツケはよろこびました。

なにしろ、根っ子の実のアメはうっとりするほど甘い、とてもおいしいアメなのですから。

とろんと舌の上で溶けて、すうっと水のような後味を残す。
夜の妖精の子どもならば、誰もが大好きなアメなのです。

「ジウムおじさん、よろこびそう」

「もちろんよ、ママが作ったんだから。おねがいね、ニツケ」

「はい」

ニツケがそう言うと、ピヨコンと棚からジオが顔を出しました。

ジオは、夜の国にいる「小さいもの」。

まっくろな体と緑のカンラン石色の目をもっていて、しっぽの先にとる白い光の色を、気分によってくるくる変えるのです。

猫や鳥、魚などいろんな姿になれるジオですが、今日は猫の姿になっているようでした。

「みゃっ」

「ジオも行きたいの？」

「みつ」

「いいわ。いつしよに行きましょう？」

そう言ってニツケがうでをのばすと、ピョンとジオがとびのつてきました。

その頭をちよつとだけなでて、門の方へと歩いて行きます。

そして家から出る扉を開けて、ニツケは後ろをふり返りました。

「行ってきます、ママ」

ニツケが手をふります。

「みゃーお」

ジオも光るしっぽをふります。

ママはその空気のゆれを感じて、「行ってらっしゃい」と明るい声で送り出してくれました。

1 - 1 旅立ち（後書き）

まだ機能に慣れずに戸惑っております。

アドバイスなど御座いましたら、よろしく願っています。

1 - 2 根っこの畑

家を出て少し歩くと、ふんわり、甘い風が流れてきました。

「みゃんっ」

ジオが、ぴんと耳を立てます。

それまでカベに手をつきながら歩いていたニツケは、立ち止まってバスケットに手を入れました。

ママからもらったアメを出して、ぱくりと一口に入れます。
それから、もう一つアメを取り出しました。

「はい、これジオの分ね」

「みゃうっ」

ニツケにさし出されたアメに、ジオが元気よくこたえます。

そして、もそもそと黒いからだを動かして、小さなリスの姿になりました。

もらったアメを、カリカリとかじるジオ。

その音を聞きながら歩いて行くと、やがて、甘い風のもとにたどり着きました。

……根っ子の実の畑です。

地面の下にある夜の国では、どこも岩の天井から根っ子が下がっていて、そこに時々、ぷっくりと金色のみつが入った実ができるので

す。

これをつめてジャムやアメにしたり、じつくりと寝かせてお酒にするのですが、良く実が取れるここは、畑として大事にされています。

「ジオ、落ちないでね」

肩に乗ったジオに声をかけて、いつもどおりの道を歩いて行きます。そのまわりではビーズのような実に光が当たって、キラキラ、宝石のレースのようにかがやいていました。

そこを、数分歩いたころでしょうか。

「やだ、道が変わっているわ!」

ニツケは叫びました。

「アブナ石が鳴いているもの。前はまっすぐ行けたのに」

胸に下げた白い石がリンリンと鳴っています。

アブナ石。

夜の妖精達にだけ、危険を教えてくださいなふしぎな石です。

夜の妖精がうまれると、必ずこれをわたすのが夜の国の決まりなのです。

「ねえ、ジオ」

「みやつ？」

いつの間にか猫の姿に戻っていたジオが、ぴこんと耳を立てました。

「ジオ、あのね。とっても遠回りになってしまいそうなの」

「みゃ……」

畑を抜けてまっすぐ行けば、おじさんの家はもうすぐそこなのに。それに、ニツケはここ以外の道を知りません。

他の道に行ったら、どんな遠回りになることが！

でも、石が危険を教えてくれているのを無視するわけにはいきません。

ニツケはなやんでなやんで、けっきょく、根っ子の畑から横道に出ました。

リンリンと言う音が止まります。

「やっぱり、こっちでいいみたい。行きましょう、ジオ」

「みー」

ジオはちよっぴり不満そうです。

きつと、早くジウムおじさんの家につきたかったのでしょう。

1 - 3 アカリタケ

さらに歩くと、やがて空気がしめってきました。

ぬれるのが嫌いなジオはそれが気に入らないようで、しつぽの先の光を青にしてだんらり下に垂らしています。

いい気分がしないのはニツケも同じでした。

なんだか、アメがしめってしまいそうな気がしたからです。

「こつちね」

壁の文字を指で調べながら、おじさんの家に向かいます。
そのとたん、何かがふわつとニツケの前でひかりました。

「ジオ？」

「みゃ！」

ジオが立ち上がります。

その声で何かがあるときづいて、そつとニツケは指を伸ばしてみました。

「花……？」

やわらかな何かが、ニツケの手にふれています。

ちよんちよんと押すとその通りにゆれるそれは、大きなかさと細い茎を持っているようでした。

大人妖精のように風のうごきだけで形を読めないニツケは、そつと

顔をちかづけてみます。

すると、若い木のうらがわのようなにおいがしました。

「アカリタケね！」

ニツケが答えを言います。

「みやおっ！」

ジオがうれしそうに鳴きました。

このアカリタケはみんなのごちそうなのです。

このスープはジオも大好き。

じんわりと体の芯からあたたまるアカリタケのスープは、暗い中でもほんのり輝き、夕日を溶かしたような光をはなち続けるのです。

「おじさんのお土産にするわ」

ニツケがアカリタケをつんで、バスケットに入れます。

それを見たジオが、しっぱの先でちょんちょんとニツケをつつきました。

「なに？」

「みゃ」

あっちあっちとしっぱでジオがニツケに教えます。

その案内の通りに歩いて行くと、ぱあっと一気にあたりが明るくな

りました。

まるで洞窟に夕日が落ちてきたよう。

なんとそこには、たくさんのアカリタケが生えていたのです。

「すごい！」

こんな場所をニツケは知りません。

きつと、パパもママも知らないのでしょうか。

誰もまだ見つけたことのない、秘密の場所にちがいありません。

「ふふ、ジオ。すごいお土産ができちゃったね」

「みゃーん」

クルルとのを鳴らしてジオがしっぽを振ります。

オイラが見つけたんだい、と言いたそうな感じでした。

アカリタケの道を抜けると、ひんやりと空気がひえてきました。

水の音がします。

「湖ね」

「みゃ」

すうつと冷えた水がたつぷり満ちた湖。

奥の方でちらちらとゆれる炎は、軽い空気と、燃える空気を混ぜて

水を作るウオタンたちが住む、水の宮殿の水晶塔のようでした。

そのしょうこに、壁にはこんな事が彫ってあります。

「このさき火気厳禁、スイソとサンソあり」

許可証を持っていないニツケは水の宮殿には入れませんが、いつか、行ってみたいと思いました。

「ジオ、アカリタケをぬらして行きましょう?」

「みゃっ」

せっかくのアカリタケです。かわかしてしまうわけには行きませんが壁に手をつきながら湖の方にニツケが近づいて行くと、ふいに、しわがれた声がしました。

「おや、おや。夜の妖精の子かい?こんばんわ」

「こんばんわ。あなたはだあれ?」

「地の妖精だよ。スキトオツタラを釣っていたんだ。そろそろ夕飯にしようと思っていたところだね。あんたは?」

「えっ?」

もう、そんな時間なのでしょうか。そう思ったとたん、ニツケは何にも食べていない事を思い出しました。

急におなががすいて来ます。

「あの」

「何だい？」

「晩ごはん、いっしょに食べてもいいですか」

「もちろんさ。よし決まりだな、行こう」

地の妖精が立ち上がりました。

1 - 4 スキトオツタラ

地の妖精の肌は、ごつごつした岩のようでした。それでも怖いと思わなかったのは、その声がやさしかったからなのでしょう。

ニツケの手を引いてくれる地の妖精が歩くたびに、ばしゃばしゃとバケツの中でスキトオツタラが跳ねる音がします。

スキトオツタラは透明な魚。

光の少ない夜の国らしく、骨が見えるくらい透明なのです。

パパが昔、こう言っていました。

「地上の魚は、水面のきらめきのフリをするためにウロコに金属の色をつけるけど、夜の国ではそれが不必要いから透明なんだよ」

地上では昼になると、水面がキラキラしていると言うのです。

だから金属の色をしていると、そのキラキラと区別がつかなくなつて、敵に狙われにくいのだとパパは教えてくれました。

もちろん、夜の妖精たちはみんな目が見えません。

それでも、他の妖精からいろいろな事を聞いて、色や、光について覚えて行くのです。

「夜の妖精、こっちだよ」

地の妖精の声がします。

だんだんと、空気があたたかくなってきました。

「ここは？」

「ワシの家さ。アツ岩がたくさんあるからね、あたたかいだろう」

「ええ、とつても」

アカリタケの道からずっと寒い場所をとおってきたニツケには、とてもうれしいあたたかさでした。

「おや、アカリタケを持っているんだね」

「はい」

「焼いてあげようか？その方が長持ちする」

「いいんですか？おねがいします」

ニツケがアカリタケをわたします。

地の妖精が、それを真っ赤に燃えるアツ岩に乗せました。

「いいにおい」

じゅうつと焼ける音がします。

やがて、アカリタケとスキトオツタラの香ばしいにおいがただよいはじめました。

透明なスキトオツタラは、焼くとおいしそうな白い色に変わります。それが待ちきれないのか、ジオがそわそわと肩の上でアツ岩を見ていました。

「焼けたよ」

地の妖精が、こんがりと焼けたスキトオツタラをお皿に乗せてくれます。

それを見下ろすジオが、ゆらゆらとしっぱをゆらし始めました。

「みゃー」

「ジオ、まだ熱いわよ」

今にもスキトオツタラに飛びつきそうなジオを、ニツケが手で押さえます。

すると、地の妖精が焼きたてのアカリタケを布に包んでくれました。

スツキリとしたにおいが布からただよってきます。

ニツケはうれしくなりました。

「カロリー草ね」

「そうだよ。最近摘んだばかりなんだ」

カロリー草には色々な種類があつて、ものを腐りにくくしたり、魚に風味をつけたりできるのです。

それはマホウではなく草の持つ力だと、地の妖精が教えてくれました。

「草が虫や病気から自分を守ろうとする力を、ワシらが使わせてもらっているだけさ」

そう言いながら差し出された布包みを、ニツケが両手で受け取ります。

それからバスケットにそれを入れ、ニツケはお皿に手を伸ばしました。

「いただきます」

「どうぞ。たっぷり食べておくれ」

ジオの分のスキトオツタラを地面に置きながら、地の妖精がほほえます。

そして、晩ごはんが始まりました。

2 - 1 知らない世界

どしいん！

地面がゆれたのはとつぜんでした。

ずしいん！とまた地面がゆれます。

「きゃっ、なに、なに！？」

ニツケは飛び起きました。

地の妖精が何かしたのでしょうか？

ジオがニツケにかくれてブルブルふるえています。

「だいじょうぶ、だいじょうぶよ。ジオ」

ぎゅっとジオを抱いて、ニツケはすわり込みました。

ずしーん、どしーん！

音がどんどん近づいて来ます。そのたびに地面がゆれます。

どんどん、どんどん音がニツケに迫ってきます――

すぐ、近くに！

「ふまれるっ！」

ニツケがそう思ったとたん、どしーん！と言う音がニツケを通りす

ぎました。

そして、

ずしーん。

どしーん…。

…ずしーん。

音は遠くの方に行ってしまいました。

「びつくりした……」

ときどきする胸を押さえて、そっと息をはきます。

いったい何がどうなっているのでしょうか。

ニツケは首をかしげました。

「じじい……どじい？」

ニツケの目には何も見えませんでした。が、なんだか、空気がちがうのです。

そのとたん、けたたましい声の上から聞こえました。

「見ろよ兄さん、夜の妖精が地上にいるぜ！」

「見ているよ弟、夜の妖精のくせに昼にいやがる！」

ぎゃあぎゃああと騒いでいるのはワタリガラス。

とうめいなガラスの体を持つ、おしゃべりがだいすきな鳥です。

「はっはあ！これはみんなに知らせないとなあ、兄さん！」

ひゅん！と風を切る音を立てて一羽がつばさをひろげます。

「もちろんさ、行くぞ、弟！」

二羽目もつばさを広げ、どこかに飛び去っていきました。

ニッケはおどろきました。

「地上……ですって？」

「いったい、どうして。」

地の妖精のしわざでしょうか。

でも、そんな悪い妖精には見えませんでした。

「とにかく、隠れなきゃ」

ワタリガラスには、いじわるなものもいると聞いた事があります。
ニッケはいそいで、隠れられそうな場所をさがしはじめました。

2・2 ぶるぶる石

次に目がさめても、やっぱり夜の国ではありませんでした。

かわいた土のおいが、地上である事をニツケにおしえています。

「帰らなきゃ」

ニツケは地面をぺたぺたとさわりはじめました。
夜の国と違ってさらっとした地面です。

「あら？」

何かが指にふれました。

「何かしら」

それは、小さな玉でした。

ニツケのおやゆびほどしかない小さな玉。

そこに彫つてある文字は、なんと、ニツケの知っている夜の国のものだったのです。

「ぶるぶる石だわ！」

ニツケはおどろきました。

「ここにも、ああ、ここにも。すごい、全部そろってる！」

全部で十個。

おばあさんに聞いた事があるぶるぶる石。

それは、行きたい場所を言うと、そこに案内してくれる石なのです。

おばあさんの声が思い出されます。

「大人妖精がな、風を読めるようになる前の話じゃ。

ぶるぶる石と言うものが、ここにはたくさんあったのじゃよ。

並べて体に巻くとな、目的の方向の石がぶるぶるふるえて行くべき方を教えてくれる。

音がしないから、おそろしい怪物に気づかれる事も少ないんじゃない」

「その石はどうなったの？」

「さあねえ、いつの間にかとれなくなってしまった。

代わりにアブナ石が採れるようになった。

もう役目が終わったと思って、ひっそりと眠ってしまったのかも知れんねえ」

夜草の糸をつむぎながら、おばあさんはそう言っていました。

カラカラ、カラカラ。

おばあさんの回す糸車の音が、なつかしく思い出されます。

あたたかい石の家で、やさしく話しかけてくれるおばあさんの顔が
思いつかびます。

「……っ」

ニツケは泣きそうになりました。

夜の国にはパパもママも、おじいさんもおばあさんもいるのです。

「…だめ、泣いてはだめ」

ぐいっと涙をふいて、ぶるぶる石をにぎりしめます。

そして、ニツケはその場に座りこみました。

「えつと……」

文字を確かめながら、地面にぶるぶる石を並べます。

それが一列に並んだとたん、ふわっと風が吹いて、ぶるぶる石のベルトができあがりました。

おそろおそろ腰に巻くと、ピッタリとニツケに合います。

ニツケは言いました。

「夜の国に帰りたいの。案内して、ぶるぶる石」

すぐに一つの石がぶるぶるとふるえました。

「やだ、くすぐりたい」

ニツケが笑うと、ぴたつと石がうごかなくなります。

それをなでて、にっこりとニツケはほほえみました。

「ありがとう、ぶるぶる石。迷ったら聞くからお願いね」

ニツケがそう言うと、全部の石がぶるぶると答えました。

ニツケは笑い転げてしまいました。

2・3 白と黒

「地上つて……暑いね」

ふらふらと岩のかけを歩きながらニツケは言いました。
何だか暑さでぼうつとして来た気がします。

「マツシロゴケの布が欲しいわ」

夜の国のマツシロゴケは、その名前の通りまっしろなコケ。
これで作った布は、アツ岩の近くを通る時に熱を少し防いでくれる
のです。

「ジオ、どこかに水はないかしら？」

そう聞いた時でした。

ずしーん！と大きな音がして、地面がぐらりとゆれました。

「きゃっ！」

ニツケが座り込みます。

その頭の上に、ぬうつと大きな顔があらわれました。

「何だあ、夜の妖精があ。あんまりぢいせえもんだから、踏みつぶ
しちまうどこだったよお！がはは！」

ひどいしゃがれ声です。

ニツケは怖さでくらくらしました。

でも、ここで負けるわけにはいきません。
ニツケはキツと声の方をにらみました。

「わ…わたしは夜の妖精ニツケよ。今、水を探しているの。あなたは誰？」

「おでかあ？おでは巨人のデオだ」

しゃがれこえが答えます。

声の元、緑のけむくじやらの巨人が、いかついあごをなでてニツケを見下ろしていました。

巨人がにんまりと笑います。

「がはは、勇気のある妖精だな。ようし、おでの質問に答えられたら水をやるよ」

「いいわ、何？」

「あつちに黒い石と白い石がある。そこから黒い石を持って来い！がはは！」

巨人は得意そうです。

何と言ういじわるでしょう！

夜の妖精の子が見えない事を知っていて、そう言っているのです。けれど、ニツケは胸をはりました。

「行って来るわ、約束守ってよね！」

「……え？」

ぽかーんとしている巨人を残して、ニツケは石の場所に向かいました。

「こっち…じゃないわ、こっちな」

石を一つ一つさわりながら、ニツケが黒い石をえらんで行きます。もちろん、色なんて見えていません。

でも、マツシロゴケは白いからアツ岩の熱をふせいでくれると教わっています。

だから石だつて、白い方が冷たいに決まっています。

黒はあたたまりやすく、白はあたたまりにくい。

ニツケはそれを、おぼえていました。

「うん、やっぱりこっちだわ」

黒い石をにぎりしめてニツケが息を吸います。

そして、おもいきり上に向かって叫びました。

「デオ！」

「ああん？」

ぬつとデオが顔を出します。

「ほら、これでしょう？」

ニツケが石をかかげます。
それを見て、デオが目を丸くしました。

「……合ってる」

「約束守ってくれるわよね？」

「ああ、おっだまげだな。見えねっでうわさはウソか？」

デオがニツケをつまみ上げます。

「うそじゃないわ」

ニツケが答えました。

あまりの高さに、ぽとつと落とされたら死んでしまっんじゃないかと怖くなりましたが、ここで弱い所を見せてはなりません。

「夜の妖精のヒミツよ。泉にまで運んでくれたら教えてあげる」

「ぶふ、がはは！ おめ、ぎにいったよ」

巨人がニツケを手の上に乗せます。

小さな夜の妖精の勇気が、何だか面白かったのです。

「づがまっでろ」

巨人が歩き出します。

そして泉に運ばれたニツケは、たつぷりと水を飲む事ができました。

デオのそばでひとねむりして、ニツケは出発する事にしました。だけど、それをデオに言うと、デオはとても悲しかったです。

「いつちまうのか……」

デオは残念そうです。

「いつしよに行かない？」

ニツケがそう聞くと、デオはうなだれました。

「おで、おおぎすぎるからよ。外に行ったら誰かふんじまうだよ。おめだつで、おいはらう気だったんだよ」

「デオ……」

ニツケはハッとしました。

デオは最初から、ニツケをふむ気なんてなかったのです。

おどろかして外に追いやってしまえば、つぶさずに済むと思っていたのです。

そのしょうこに、デオの目は真っ赤でした。

ニツケが寝ている間にふんでしまわないよう、ずーっと起きていたのです。

「さ、さびじくなんがねえぞ。おめえみでえな小さいの、どっか行つじまえばいいんだ！」

「デオ……」

「おでと話した変な妖精の事なんで、わずれで、やるっ……」

ぼろぼろとデオが泣いています。

見えなくても、音でニツケはわかるのです。

ニツケは悲しくなりました。

「ねえ、デオ」

デオの方を向いてニツケが言います。

「わたしが夜の国にかえったら、地の妖精さんをお願いしてあげるわ。あなたを小さくしてくれますようにって」

「ほんどこが!？」

デオが泣き止みました。

ニツケがうなずきます。

「ええ、本当よ。わたしをふまないでくれたお礼。約束するわ」

「おめ、おめえ、いいやづだな。デオ、ここで待つでる。ニツケ、無事に夜の国に着けるよう祈ってる」

デオがまた涙ぐみます。

ニツケも胸がじーんとしました。

「ありがとう、デオ」

大きなデオの手に、ぎゅっとだきついてニツケがお礼を言います。

デオとお別れするのは、ニツケもさびしかったのです。

デオは別れぎわに大きな葉っぱを一枚くれました。

夜の妖精のニツケが、太陽の暑さに負けてしまわないためです。

それをかさにして、ニツケはぶるぶる石の案内する通り、旅を続ける事にしました。

2 - 4 正しい扉

葉っぱのかさをさして行くと、大きなカベの前に出ました。
壁をさわってニツケがたしかめます。

その指が、コツンとでっぱりにふれました。

「扉だわ」

この丸みのあるでっぱりは、ドアの取っ手にまちがいありません。
その取っ手を引こうとした時でした。

「そのとおーり！」

急に声がありました。ニツケの目の前です。
でも、ニツケの目の前にあるのは扉だけ。

「扉……さん？あなたがしゃべっているの？」

『そのとおーりっ！』

今度は、右からも左からも声がありました。
ジオがピヤツと丸くなります。

「私は一番右の扉だ」

声が右の方からしました。

「俺は右から二番目の扉だ」

右の方、少し近い場所から声がしました。
扉が順番に声をかけて来ます。
最後に、一番左の扉がこう言いました。

「ボクは一番左の扉。さあ、旅人さん答えておくれ。正しい扉はひとつ。後は開けてもすぐ力べさ。一回で当てられなかったら、明日までの扉も開かないよ！」

「どうして？」

ニッケがたずねます。

「それがボクたちだからさ」

扉が得意そうに答えました。
どうやら、正しい扉を教えるはもらえないようです。

「ぶるぶる石、正しい道はどれ？」

そう聞いても、なぜか石は答えてくれません。
それを見た扉が言いました。

「そいつはダメさ。ぶるぶる石はここでは使えないんだ」

「どうして？」

「扉のまぼつの力さ。さあ、どうするんだい旅人さん。あきらめて戻るかい？」

「戻らないわ」

そう言つて、ニツケは一番右の扉に近付いて行きました。

「私を開けるのかね？」

右の扉が聞いてきます。

ニツケは答えず、その扉をコンコンと叩きました。
それから扉に耳をつけて、首を横にふります。

「あなたの後ろはカベね。音がはねかえつて来ないもの」

「何と！」

「何だつて！？」

扉達がざわめきます。

ニツケはそれにかまわず、次々と扉をしらべて行きました。
真ん中の扉を少しすぎたあたりでしょうか。

コン、とたたいた音がひびいて行くのが聞こえたのです。

「あなたね」

ニツケが取っ手を引きます。

そのとたん、ふわっと前から風が吹いて来ました。
当たりです。扉の向こうに道があるのです。

「やられた！」

扉のひとつがさげびました。

「ちくしょう、俺は使われていない扉っぽくサビてみたんだぞ！」

正解の扉がくやしがります。

「ボクなんて、しょっちゅう使われてる扉みたいにピカピカになっていたのに！」

一番左の扉が文句を言います。

ニッケはにっこりと笑いました。

「通っていいのよね？」

そう聞くと、扉がいつせいに口をそろえて言いました。

『通つてよーし！』

バタバタと開いたり閉じたりしながら、それぞれの扉がニッケの
出発を見送ります。

ニッケはそれに手をふって、扉の先へ足をふみいれました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1439y/>

夜の妖精の小さな旅

2011年12月3日17時51分発行